

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Life of Bronisław Piłsudski : Russian Pioneers in Ethnological Field Research

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 九祚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003748

第 1 章

ピウスツキの生涯

ロシア民族学のあけぼの

——革命運動から民族学への道——

加 藤 九 祚*

1. はじめに

ピウスツキ **Бронислав Пилсудский** は19世紀末から20世紀初頭にかけて、サハリン原住民の民族学的研究によって世界に貢献した。しかし彼がサハリンにおもむいたのは、自らの自由意志ではなくて、19世紀後半のロシア社会で大きなうねりとなっていたナロードニキ（正しくはナロードニチェストヴォ **Народничество** で、その意味はナロードニキの思想、運動全体をさす。ナロードニキ **Народники** とはナロードニチェストヴォの運動家をさす。くわしくは後述）の革命運動に加わったかどで、国家権力によって、政治犯として追放されたのである。

ところが当時のロシアでは、ピウスツキと同じようにナロードニキ革命運動に加わり、シベリアへ追放され、孤独と困苦の中でシベリア原住民の民族学的研究を行ない、不朽の業績をあげた人々がほかにも何人かいたのである。その多くはピウスツキよりも年令的に先輩であり、なかには生き方や学問の研究方法においてピウスツキに大きな影響をあたえたと考えられる人々も含まれている。ヨヘルソン **В. И. Иохельсон**, **ボゴラズ В. Г. Богораз**, **シュテルンベルグ Л. Я. Штернберг** らの民族学者であるが、とりわけシュテルンベルグはピウスツキとほぼ同じ時期にサハリンで流刑生活をおくり、現地で何度も会って話した間がらであった。そのほかクレメンツ **Д. А. Клеменц** という民族学者はヨヘルソン、ボゴラズその他多くの研究者を世に出すうえで大きな貢献をした。

ロシアの民族学史をながめるとき、ナロードニキの革命運動出身の人々の多いのに驚かされる。当時、シベリアの少数民族の民族学的研究がほとんど手つかずのまま残されていたという状況もあるであろうが、これは実に興味深い現象である。ロマンチックでヒューマニズムにあふれたナロードニキの思想というものの特殊性によるものか、それとも流刑に処せられた人々が自分たちのみじめな運命を原住民の悲惨な生活

* 相愛大学人文学部 本館名誉教授

に重ね合わせ、そこからヒューマンズ的パトスを汲みとったからか、おそらく私はその両方であろうと考えるものである。

ボゴラズとシュテルンベルグは現在のソ連でも、ロシア・ソビエト民族学の「クラシック」であるといわれる。私はここでヨヘルソンを含めて4人の人物の略伝を紹介し、民族学における「ロシア学派」の源流について考えてみたいと思う。

2. ドミトリ・アレクサンドロヴィッチ・クレメンツ

Дмитрий Александрович Клеменц

クレメンツはナロードニキ革命運動出身の学者、探検家、作家として知られる。クレメンツは流刑人出身のシベリア民族学研究者としては最年長であった。1848年、サマラ県ゴリャニノワ村に生まれ、はじめカザン大学、ついでペテルブルグ大学に学んだが、学生の革命運動に加わったために、大学は中退に終わった。1872年、ペテルブルグでナロードニキの「チャイコフツィ Чайковцы」グループに加わり、何度か非合法で外国に出、ラヴロフ П. Л. Лавров の主宰する『フペリョド Вперёд』その他のナロードニキ的雑誌の同人として活躍した。「チャイコフツィ」グループは1869年ペテルブルグでチャイコフスキー Н. В. Чайковский とナタンソン М. А. Натансон らを中心に結成されたもので、ナロードニキの理論家ラヴロフの思想に基づいたものであった。ラヴロフは、革命のためには時間をかけて農民層を意識変革する必要がある、そのためには、青年たちが長期にわたって農村に滞在し、熱心に「社会革命」 Социальная революция の必要性を説くべきであると力説した。ラヴロフによれば、歴史の原動力は「批判的に思考する個人」 Критически мыслящая личность であって、階級闘争ではない。したがって学生運動や労働者のストライキ、ツァーリ政府に対する抗議運動などは、革命運動にとって有害無益であるという。この考え方はまもなく両極に分化した。1つは穏和な自由主義的方向、もう1つは個人的テロの方向である。さて、クレメンツは1878年頃ナロードニキの代表的団体『土地と自由』 Земля и Воля の創設者のひとりとなり、その機関誌の発行にたずさわったが、1879年逮捕され、南シベリアのミヌシンスクに行政追放された。ここで彼は、マルチャノフ Н. М. Мартянов という人の努力で開設されたばかりのミヌシンスク博物館の収蔵品の整理を引受け『ミヌシンスク博物館の古代遺物』 Древности Минусинского Музея と題するカタログをつくり、1886年にトムスクで刊行された。彼はそれまで考古学のしろうとであったが、本書はロシア内外で大きな反響をもたらした。また、ミヌシンスク

から各地へ旅行して旅行記を発表した。その後トムスクへ移り「シベリア新聞」の編集陣に加わり、「ヌルガリ」というペンネームで小品を書いた。ここでもいくつかの旅行記を書いたが、1890年には「ミヌシンスク地方原住民の手太鼓」と題する民族学的論文を発表した。数度のモンゴル旅行の後、1891年には著名なチュルク学者のラドロフ В. В. Радлов を長とするロシア科学アカデミー・オルホン調査団に加わった。これはヤドリントツェフ Ядринцев によって発見されたハラバルガスン、カラコルムの調査を目的としたものであったが、彼はこのとき精細な日記をつけ、1898年に刊行された。

1892年イルクーツクに移り、ロシア地理学会東部シベリア支部で研究する一方、『東方評論』の編集に加わった。ロシア地理学協会東部シベリア支部では著名な探検家ポターニン Г. Н. Потанин が1887年から90年まで責任者として働き、活動はたいへん活発であった。クレメンツは2年間の北部モンゴルのウルガからコブドへの調査旅行を行なった。

クレメンツがヤクーチヤ調査団を組織したのはこの頃である。彼は多くの人から好かれる性格の人で、民間の資産家たちから絶大な信頼を得、その資金を学術調査に引き入れる能力をもっていた。1890年代のはじめ、彼はイルクーツクの富豪シビリヤコフ И. М. Сибиряков の資金によって、シベリアに追放された政治犯を動員してヤクーチヤ調査団を編成したのである。S. F. コワリク С. Ф. Коварик, I. I. マイノフ И. И. Майнов, V. I. ヨヘルソン, E. K. ベカルスキー Э. К. Пекарский, S. V. ヤストレムスキー С. В. Ястремский, V. ボゴラスら、シベリアの民族と言語の研究にすぐれた業績を残した人々は、この調査団から出発したのである。1895年から約3年間の調査であった。この調査団を組織したクレメンツの業績は極めて大きいと言わなければならない。またクレメンツは1893～98年間のモンゴル調査での地質調査を行なった。この関係の論文では、「ミヌシンスク地方とアチンスク地方の塩湖とエニセイ川上流部デボン紀地質について」と題する論文がある。

1901年の初め、彼はペテルブルグに出来た民族学博物館の創設に招かれ、その初代館長となった。1904年山地アルタイのカトゥニ川、チュイスキー地方を調査、1898年、科学アカデミーのトゥルファン調査団の団長となり、その成果は『トゥルファンとその遺物』(*Turfan und seine Alterthumer*) (1899年刊)としてまとめられ、その後の国際的研究熱のきっかけをつくった。このほか遊牧民に関する評論、シベリアの住民についての論文などがある。

1910年病いのため引退し、モスクワに移って、1910～11年雑誌『ルスキエ・ヴェド

モスチ』に回想録を発表した。1914年1月8日、肺炎のために66歳でモスクワで亡くなった。

3. ウラジミル・イリイチ・ヨヘルソン Владимир Ильич Иохельсон

この人物は北東アジアのユカギール、アレウト、イテリメン、コリヤク、ヤクートなどの研究者として知られている。とりわけユカギル族についての大著はユニークである。ヨヘルソンは1855年1月14日、ヴィルノ Вильно の古いユダヤ人の家庭に生まれた。クレメンツより7歳下、セロシェフスキー В. Серошевский より3歳上、シュテルンベルグよりも6歳上、ボゴラズよりも10歳上、ピウスツキよりも12歳上ということになる。家庭ではきびしい教育を受け、はじめユダヤ教の神学校 Раввинское училище に入った。ここでもナロードニキのサークルができたが、それは思想的に П. Л. ラヴロフ (1823-1900) に近かった。ヨヘルソンはこのサークルではじめてナロードニキ運動を知り、ズンデレヴィッチ А. И. Зунделевич と知り合った。

1873年彼はウィルノの実科学校 Реальное училище に入った。1875年ナロードニキのサークルが壊滅したとき、彼はドイツにのがれ、76年夏までベルリンで仕上げ工として働きながら、講演会や講習会に参加して勉強した。この頃、若きベルンシュタイン、カウツキーらにも出会った。ドイツでは、当時はまだ、社会主義者を弾圧するビスマルクの法律は公布されていなかった。

1876年、彼は非合法で国境を越え、キエフ経由クレメンチュグに着き、若者たちの間で宣伝活動を行なった。しかしサークルが発覚し、77年再び国境を越えてベルリンにおもむいた。同じ年ベルリンからモスクワに至り、「土地と自由」派の非合法出版物の運搬者の役割を果たした。1878年には憲兵長官メゼンツォフ Мезенцов 暗殺のテロ集団に加わったが、まもなくテロ活動に疑問を感じ、「人民の中へ В народ」を実践するためにキエフ付近の農村に入った。

1879年夏、彼は「人民の意志 Народная воля」派に籍をおき、「パスポート係 Паспортный стол」をつとめた。この頃、ズンデレヴィッチと親交を結び、深い影響をうけた。1879年末彼はペテルブルグのゴロホヴォイ通りにあった「人民の意志」派の最強のアジトの責任者となった。そして仲間たちをかくまったり、外国へ脱出させたり、執行委員会との連絡をとったりした。著名な革命家ガルトマンとも交友し、エンゲルスともロンドンで知り合った。1879～1880年の冬の頃について、後年彼はつ

ぎのように回想している。

„Я был в близком общении с лучшими людьми бурной революционной эпохи…… Я находился уже, можно сказать, на той стороне тургеневского „порога” за которым погибли почти все, кого я тогда знал. Только немногие из них после долгих лет испытаний снова вернулись к жизни. Но летом 1880 г. я вышел из стана обреченных и уехал за границу. Этот уход с поля битвы оставил след на всю мою последующую жизнь. В пятилетней эмиграции, трехлетнем заключении и десятилетней ссылке, а затем в вольных путешествиях и среди научных занятий, я не находил ни полного удовлетворения, ни должного покоя. И теперь, на старости лет, когда под влиянием жизненного опыта и критики все прошлое уже представляется в несколько ином свете, я все еще в виде укора вижу перед собой властную фигуру Желябова, слышу командные слова Александра Михайлова и чувствую ясный, светлый взгляд Перовской.”

「私は当時、沸きたつような革命時代のすぐれた人物たちと親しくつき合っていた。……私はその頃、ツルゲネフの言う「閼」の向こう側に立っていた。当時私が知っていたほとんどすべての人たちは、この閼の向こう側で死んだ。ほんのわずかな人たちが長年にわたる試練の後、いのちの側〔閼のこちら側〕へもどったのである。1880年夏、私は破滅の陣営から抜け出て外国へ去った。これは言わば戦線離脱であったが、このことはその後の私の全人生に深い痕跡を残した。それからの5年間の亡命生活、3年間の監獄生活、10年間の流刑生活、その後の自由な旅行と研究生活を通じて、私は充分満足したことも、しかるべく落着いたこともなかった。今や私は、老年になって、人生経験と批判の影響をうけて、一切の過去はいささかちがうように見えてきたが、しかしなお、叱責の形で自分の前に力強いジェリャボフの姿を見、アレクサンドル・ミハイロフの命令調の言葉をきき、ソフィヤ・ペロフスカヤ С. Перовская の澄んだ明るい目なごしを感じるのである」〔Шавров 1935 : 7〕。

ジェリャボフ Желябов (1851-1881) とは言うまでもなく「人民の意志」派の最高指導者(テロリスト)のひとりであり、1881年3月1日の皇帝アレクサンドル2世暗殺のオルガナイザーのひとりであった。4月3日、仲間とともに死刑に処せられた人物である。またミハイロフ А. Михайлов も「人民の意志」の最高幹部のひとりで

あり、1882年ペトロパウロスクの独房で死んだ。ペロフスカヤ（1853～1881）は、ナロードニキ運動の一線に立ち、後にさきにのべたジュリャボフの妻となった人で、皇帝暗殺事件で絞首刑に処せられた。政治犯として処刑されたロシア最初の女性であった。ヨヘルソンはしかし、国外に出てからも「人民の意志」派との関係を絶たず、83—85年はジュネーブで「ウェスニク・ナロードノイ・ヴォーリ Вестник Народной Воли」の印刷所を主宰した。

1885年末、ヨヘルソンは亡命生活にあきてロシアに帰る決心をした。彼はそれまで多くの人々の脱出を手つだった国境通過のベテランであったが、うかつにも今度は自分が逮捕されてしまった。彼はペテルブルグに連行され、ペトロパウロフスク要塞に2年間収監された後、10年間のシベリア流刑に処せられた。彼はコリマ川のスドネ・コリムスク Среднеколымск の近くでくらししたが、条件は他の流刑囚よりもきびしかった。

1894年、かつて革命運動の初めの頃知りあっていたD・クレメンツが当時、ロシア地理学協会東部シベリア支部の責任者であった。クレメンツは流刑囚を使って民族調査することを計画し、ヨヘルソン、ペカルスキー、マイノフ、ボゴラズ、ヤストレムスキー、コワリクらを招いて2年間（1895—1897）調査した。クレメンツのこの事業は、多くのすぐれた才能を開発した画期的のものであったと言える。クレメンツという人物がいなかったら多くのナロードニキ出身民族学者は世に出られなかったであろう。ヨヘルソンはこのときそれまで死滅したと考えられていたユカギル族の調査をした。ユカギル語のコリマ方言とツンドラ方言9000語を集め、50編の口誦伝承を採集した。ユカギル族の民族学的調査の成果は『ヤサチナヤ川とコルコドン川に沿って』（По рекам Ясачной и Коркодону, СПб., 1898年）として刊行された。これはヨヘルソンの研究者としての輝かしい出発を意味したのである。ときに、ヨヘルソン43歳であった。

彼は学問研究の魅力にとりつかれた。1898年いったんペテルブルグに帰り、アカデミー会員で著名なチュルク学者ラドルフの推ばんによって、ボゴラズとともにジュサプ調査団（The Jesup North Pacific Expedition）の一員に加えられ、コリヤク族とユカギル族の調査を依頼された。これはその後のヨヘルソンの運命を変えたのである。彼は40歳をすぎて結婚した妻ヨヘルソン=ブロドスカヤ Д. Л. Иохельсон-Бродская とともに調査をつづけたが、このときにも多くの蠟管による録音がなされた。彼の班はベルリン、アントワープ、ニューヨーク、サンフランシスコ、横浜、ウラジボスト

クを經由して、1900年夏カムチャッカ半島のギジガに着いた。1902年までのフィールドでぼう大な資料が集められ、総括され、*The Koryak* (2巻)、*The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus* (3巻)として刊行された。研究者としてのヨヘルソンの名声はこれによって決定的となった。彼は当時、主としてドイツとスイスに住んだ。モスクワの富豪リャブシンスキー *Рябушинский* はカムチャッカ調査団を計画し、ヨヘルソンはアレウト族の調査を依頼された。彼はこれに応じ、1908年春から1911年秋まで3年半にわたって調査し、その間アレウト語の単語5000語、神話150編のテキストを筆記し、イテリメン語についても多くの資料を採集した。まず言語から入るという方法はボゴラズ、シュテルンベルグその他みな同じであった。1912～22年間、ヨヘルソンははじめ外国、その後一時レニングラードの人類学・民族学博物館で研究した。1922年以後は、ソ連科学アカデミーによる出張を機会にニューヨークに永住、1937年11月2日そこで死亡した。

4. ウラジミル・ゲルマノヴィッチ・ボゴラズ Владимир Германович Богораз

ふつう作家としてタン・ボゴラズ *Тан-Богораз* ともよばれている。民族学者としては、チュクチ族の研究者として不朽の業績を残した人物である。ボゴラズ *Натан Менделевич* は1865年4月15日、ヴォリンスク県オヴルチ *Овруч* (今はジトミル県)のユダヤ人の家庭に生まれた。1885年までの名前はナタン・メンデレヴィッチ *Натан Менделевич Богораз* であったが、その年彼はユダヤ教徒からロシア正教に改宗し、ウラジミル・ゲルマノヴィッチと名をつけた。ペンネームのタンは旧名のナタンから「ナ」をのぞいたものである。幼いとき一家はタガンログに移り、1872年、8歳のときタガンログのギムナジウムに入った。タガンログは南ロシアのドン河口に近いアゾフ海岸の町である。当時学校はたいへんきびしく、彼自身の回想によれば、一種の「矯正大隊 *Исправительный батальон*」のようであった。この頃ボゴラズは5歳上の姉プラスコヴィエ・ボゴラズ *Прасковье богораз* から深い影響をうけた。彼女はペテルブルグの女子専門学校在学中、革命的ナロードニキの組織である「土地と自由」(1876年結成)に参加し、この組織が活動をやめた1879年秋には「ナロードナヤ・ヴォーリャ *Народная воля*」(人民の意志)の一員として、ペテルブルグの非合法印刷所で働いた。1878年春、彼女は春休みのとき両親のもとに帰り、熱情をこめてナロードニキの思想を語った。またペテルブルグから非合法出版の詩集(おそらくは1877

年ジュネーブで出版された『鉄格子の中から Из-за решетки』)を持ち帰ってナタンに見せた。ナタンはこれによって深い感銘をうけた。

1880年春、15歳でタガンログのギムナジウムを卒業、姉とともにペテルブルグへ出、その秋ペテルブルグ大学の物理数学科に入り、1年後法学部経済学科に移った。

ボゴラズは入学直後から学生運動に加わり、マルクスの「資本論」輪読会(1880年結成)に加わり、学生のナロードニキ・サークル(1880年末から1881年にかけて形成)に参加した。その中心的人物はA.ジェリャボフとS.ペロフスカヤであった。このときボゴラズはヤクボフスキーとレフ・シュテルンベルグとともに学生グループのリーダーのひとりとなった。

1881年3月1日、ナロードニキの投げた爆弾によって皇帝アレクサンドル2世が殺害され、きびしい弾圧の時代がはじまった。主謀者たちは処刑されたが、16歳になったばかりのボゴラズ、シュテルンベルグを含む学生たちの意気はなおさかんであった。

1882年11月、ボゴラズは当局に逮捕され、直ちに大学から追放され、警察の監視のもとに南ロシアのロストフ・ナ・ドンに追放された。1カ月後タガンログへ移されたが、83年初頭ナロードニキのサークルがつくられ、ボゴラズはここで経済、社会、歴史の講義をした。しかし83年6月17日彼は再逮捕、翌年3月末までタガンログの監獄に入り、つづいて85年3月まで当局の監察下におかれた。

その期間が終わった後、タガンログに帰ったボゴラズはさらに運動をはじめ、1885年5月B.オルジフという仲間と知りあい、ノボチェルカスクにあったナロードニキの南ロシア・グループに参加した。シュテルンベルグも同じであった。しかしナロードニキ運動はすでに凋落期を迎えていた。ヴェラ・フィグネルは1883年2月、ゲルマン・ロパチンは1884年秋に逮捕された。ボゴラズらはこの運動の復興に全力をつくした。1885年7月ウラジミール・ゲルマノヴィッチと改名、その秋から完全な非合法活動に入り、橋の下に寝たりした。

南ロシア・グループの集会が開かれ、「人民の意志」のパンフレットが編集された。ボゴラズはその11-12号に論文と詩を発表した。

1886年1月23日、地下出版所の印刷工は逮捕、2月22日仲間のオルジフ逮捕。ボゴラズはモスクワと合流して積極的活動をはじめたが、1886年12月9日逮捕された。12月13日ペテルブルグのペトロパウロフスク要塞へ連行、1年半の間独房に入れられた。

1888年11月2日の勅令によって東部シベリアへ10年間の流刑が確定し、1889年5月、流刑囚の隊列に加えられて出発、3カ月後コリマ河岸のスレドネ・コリムスクに着いた。ときにボゴラズ、24歳であった。

現地に約50人の政治犯流刑囚がいたが、大半は若く、わりあい自由に行動することができ、調査活動もすることができた。彼はその調査活動を最後のナロードニキにあたえられた「時代の社会的任務」 Социальное задание эпохи として自覚するようになった。現地には16～17世紀以来のロシア人やウクライナ人もいた。ボゴラズは彼らの生活の調査をはじめた。1894年6月には地理学協会東部シベリア支部の学術調査団への参加を許され、1897年まで3年間チュクチ族やラムート（エヴェン）族の生活を調査した。

彼はまずチュクチ、ラムート、エスキモーの言葉をおぼえ、その言語で民話や伝承の記録をはじめた。筆記にはすぐに氷結するインキの代りにトナカイの血を利用した。調査結果は東部シベリア支部へ提出されたが、特別の委員会によってそのすぐれた価値がみとめられ、残った刑期をイルクーツクですごせるように配慮された（1898年9月25日）。ここでチュクチ族の調査資料が整理され、その成果が〈Краткий очерк об исследовании чукоч Кольмского края〉 (Известия Восточно-Сибирского отделения Русского Географ. общества, т. 30, Иркутск, 1899) として刊行された。これが研究者ボゴラズの出発であった。

1898年11月2日をもってボゴラズの流刑期限が切れ、ある程度の自由を得た。地理学協会副総裁の熱心な努力によって、1899年1月、ボゴラズは収集した資料を科学アカデミーに提出するという名目をもってペテルブルグ入りを認められ、5月7日地理学協会の集会で「コリマ川のロシア人」という題で報告した。このときボゴラズ34歳であった。これも1899年、雑誌「ジズニ」（6巻）に発表された。

一方、ボゴラズは革命的ナロードニキの詩人として出発し、シベリア流刑中はチュクチ族の生活取材した小説を書いた。またペテルブルグ移住後もいくつかの作品を発表した。1899年5月27日、マルクス主義者とナロードニキによるプーシキン100年祭りでは、ボゴラズは、「ノーボエ・ヴレミャ」のグループに反対して「ペンの強盗たちへ」 Разбойникам пера と題する自詩を朗読した。ボゴラズの首都追放が日程にのぼっていた。

1899年夏、ロシア科学アカデミーとアメリカの自然科学博物館の協力によるジュサップ記念北太平洋調査団が結成され、ボゴラズはラドロフらの推挙によって、これに招かれた。その年の11月、ボゴラズはベルリン、パリ、ロンドンを経由してアメリカに向い、1900年のはじめニューヨークについた。そこから、ヤクーツク流刑のときの仲間ヨヘルソンとともにサンフランシスコに向い、さらにウラジボストク、ペトロパウロフスクを経由して、1900年7月4日アナディルに着いた。それから1901年秋ま

でカムチャッカ、チュコート半島のチュクチ、エスキモー、コリヤク、カムチャダルなどの民族の集落を訪れ、ローレンス島へも旅行した。蠟管によるフォークロア資料の収集もなされ、後年これに基づいて比較文法や辞典が刊行された。1901年末ペテルブルグに立寄り、1902年2月再びアメリカに向かった。

ニューヨークで、1902年秋まで収集資料を整理し、英語で4巻で刊行された。うち1巻は著者自身の訳によって、革命後ロシア語で刊行された。これによって、ボゴラズは世界の第1級の民族学者としての評価を得た。

1903年秋から、ちょうど1年間ボゴラズはカナダ、パリ、イタリアなどを旅行した。多くの旅行記を書いたが、中には「日本にて」、「満州路をゆく」もある。これは著者が1901年アナディルからカムチャッカ、日本を經由してペテルブルグにおもむいたときの紀行である。またアメリカ在住のロシア人を題材にした作品も多数発表した。アメリカ式の生活様式には、どちらかと言えば、批判的であった。

1904年10月、ボゴラズはロシアに帰り、ペテルブルグに住んだ。39歳であった。当時日本との戦争の最中であり、国内は騒然としていた。1905年3月4日、彼はヤスナヤ・ポリャナを訪れ、レフ・トルストイに面会した。彼は作家活動はつづけたが、ポリシェビキはむろんのこと一切の政党に属さなかった。1908年夏以後、彼はロシアの国内旅行に出かけ、旅行記を発表した。1914年、第1次大戦がはじまると、衛生部隊の1員として前線におもむき、新聞のために、戦争肯定の立場で通信を書いた。これについては、晩年後悔しているようである。彼は自伝の中で、自分自身について、いくらか自嘲的につぎのように言っている。「革命家だった。それから小説家、あくことを知らぬ芸術家、世界市民、愛国者、ついには、小心な俗物となった」*Был революционер, потом беллетрист, ненасытный художник, всемирный гражданин и стал патриот, малодушный обыватель* [Кулешова 1975: 108]。しかし研究によれば、彼のレポートには反戦的な部分もあったが、それは検閲で「没」にされたといわれる。

革命後はシュテルンベルグとともにレニングラードの人類学・民族学博物館、レニングラード大学、科学アカデミー付属宗教史博物館などで後進の指導にあたる一方、作家活動をつづけた。またチュクチ語のためのアルファベット、教科書などをつくった。

ボゴラズは1936年5月10日、レニングラードからロストフ・ナ・ドンへ向かう車中で死んだ。71歳であった。

5. レフ・ヤコヴレヴィッチ・シュテルンベルグ Лев Яковлевич Штернберг

ソ連民族学の「クラシック」のひとりシュテルンベルグは、1861年4月21日（新暦5月4日。3日とする文献もある）、今のウクライナ共和国西北部にあるジトミルのユダヤ人の家庭に生まれた。この年は、ロシアにおいていわゆるナロードニキ組織が誕生した記念すべき年である。すなわち「民衆の中へ」をスローガンにしたザイチネフスキー П. Г. Заичневский とアグリプロプロ П. Э. Агрипропуло のグループがモスクワで結成され、ナロードニキ思想の基本命題（ロシアは西欧とは異なる発展をする、農村共同体はロシアが社会主義にいたるうえで経済的、政治的基盤となり得る）をもちこんだ「若き世代へ」と題する宣言が発表されたのである。

シュテルンベルグは1881年ジトミル Житомир のギムナジウムを卒業したが、この年の3月1日、ナロードニキの「人民の意志」派のひとりグリネヴェツキーの投げた爆弾によって、皇帝アレクサンドル2世がペテルブルグで暗殺された。ナロードニキのテロ集団はこれをきっかけにして民衆が蜂起するものと期待したが、なんの大衆蜂起も起こらず、逆に多くの中心人物が逮捕され、組織は崩壊に傾いた。殺された皇帝の後にはアレクサンドル3世が即位した。

シュテルンベルグは1881年秋、ペテルブルグ大学の物理数学科に入学したが、学生の騒動に加わって逮捕され、退学処分を受け、首都への立ち入りを禁止された。彼はいったん郷里のジトミルへ帰り、1883年オデッサのノボロシースク大学の法学部に再入学した。ここで彼は、当局の弾圧によって壊滅したナロードニキの「人民の意志」派の再建にのり出し、1883年じゅうに、オデッサに非合法の地下組織をつくった。これに И・フメレフツェフ、И・スヴォロフ、В・ボゴラズら多くの青年たちが参加した。またこの組織は Л・コガンーベルンシュテイン、Б・オルジフ、В・ブラジニコフ、А・シェフテル、А・マカレフスキー、А・ガウスマン、М・クロリらの有力な革命家たち、および他の諸都市のナロードニキ組織と連絡をとった。

1884年10月、『資本論』の最初のロシア語訳で知られる革命家ロパティン Г. А. Лопатин (1845-1918) (彼も当時「人民の意志」派の再建に努力していた) が逮捕されて後、ツァーリ政府の弾圧はいっそうきびしさを増した。「しかしレフ〔シュテルンベルグのこと〕はくじけなかった。彼は崩壊した組織を建てなおそうと全力をつくした」と友人の М・クロリは書いている [Свнченко 1963: 59]。彼はこの目的をもって、ナロードニキの地下組織の残っているいくつかの都市を旅行した。その結

果、1885年9月、シュテルンベルグとブラジニコフの主導下にエカチェリノスラワで地下の大会が開かれ、「人民の意志」派の南部グループの執行委員会が結成された。これにはシュテルンベルグ、オルジフ、ボゴラズ（後の民族学者）らが名をつらねた。しかし「人民の意志」の組織は長くつづかなかつた。ロパーティンの仲間のひとりセルゲイ・イワノフが逮捕され、暗号で書かれた革命運動家たちの名簿が当局の手中に入り、その追求がはじまった。シュテルンベルグも指名手配のひとりであった。1886年4月27日彼は逮捕され、約3年間オデッサの中央監獄に監禁されたイワノフのメモに関連して取調べをうけた。

彼が監獄に入っている間に、ペテルブルグでは別の大事件が起こった。すなわち、1887年3月1日、「人民の意志」グループによるアレクサンドル2世暗殺の6周年目の記念日、ネフスキー大通りで皇帝アレクサンドル3世暗殺未遂事件が勃発したのである。これもまた「人民の意志」グループのテロ集団であったが、首謀者のひとりにはレーニンの長兄ウリヤノフ *А. И. Ульянов* であった。この事件に関連して74人が逮捕されたが、中にはレーニンの姉アンナ・ウリヤノワも含まれていた。15人の革命家（うち女性3人）が死刑を宣告されたが、執行されたのはウリヤノフ以下5人で、1887年5月8日、シュレッセリブルグ要塞の庭で絞首刑に処せられた。ピウスツキ（後のギリヤクおよびサハリン・アイヌ研究家）もこの事件に関係して、はじめ死刑、その後特赦によって15年のサハリン流刑に処せられた。

シュテルンベルグは1888年11月オデッサで裁判にかかり、10年間サハリンへ行政追放の処分をうけ、1889年3月30日、義勇船隊の「ペテルブルグ」号でオデッサ港を出航、約2カ月半後の5月19日、サハリンのアレクサンドロフスク港に着いた。

シュテルンベルグのような行政的追放処分の政治犯は苦役を課せられる徒刑囚とはちがって、強制労働をまねがれた。行政的に追放された人たちも、囚人ではあったが、当局の許可を得て自分のために働いたり、サハリン島のなんらかの企業に自由にやとわれることができた。彼らは行政当局のきびしい監視のもとで、住居も民間から間借りすることを許された。

シュテルンベルグは1889年5月アレクサンドロフスクの農民のフェインベルグ、ついで刑期明けの移住者シュヴェツォフの家に住み、その都市の同じく「人民の意志」出身のブラジニコフとともに、12月からヴォリノフ家に下宿した。ヴォリノフもまたロパーティン事件で15年の刑をうけた政治犯であったが、彼の妻アンナは自由意志でサハリンに移住してきたのであった。

シュテルンベルグはここで仲間たちを助けたり、講義をしたり、子どもたちの面倒

をみたりした。また持参した書物を利用して語学などを熱心に勉強した。

ギリヤク研究への出発

1884年から1905年までサハリンへ追放・流刑処分に処せられた政治犯は54人を数えた [СЕНЧЕНКО 1963 : 89]。その中には1882～86年間帝政ロシア治下のポーランドで活動した革命組織「プロレタリアート」のメンバーも含まれていた。この団体は労働者を中心としていたが、1884年ロシアの「人民の意志」との間で協定を結び、一致協力して専制ロシアにたいするたたかいをすすめることを約した。しかし1885年秋、帝政ロシアのワルシャワ総督によって主力メンバー29人が逮捕され、軍事裁判にかけられ、うち17人がサハリン流刑に処せられた。彼らはほとんどはサハリンで徒刑囚として苦役に従事した。

シュテルンベルグはアレクサンドロフスク滞在中に彼らとの接触を保った。これは当然のことながら当局の喜ばないところであった。しかしこれに関連してシュテルンベルグのその後の運命に大きな影響を及ぼした出来事もあがった。「プロレタリアート」党出身の政治犯ドムブロフスキー П. К. Домбровский の拘束事件である。

ドムブロフスキーは1860年ワルシャワ県ムシチェンカ村の馬丁の子として生まれ、1879年以後製靴工として各地で働いた。1883年「プロレタリアート」党に参加し、アジテーターとして頭角を表わした。翌年、ツァーリー政府の手先スクルジプチンスキーの暗殺を企図したグループに加わり、国外脱出の車中で逮捕されて16年の刑をうけ、1887年5月20日サハリンに送りこまれた。彼は終始重労働を強いられ、88年7月にはサハリンの政治犯騒乱事件にも参加した。

1890年1月のある日の夕方、厳寒の中でドムブロフスキーの身がらが拘束された。彼は高熱で寝ていたところを縛りあげられて病院に強制収容された。この事件を知ったシュテルンベルグらは「この寒さの中で病人を強制収容するとは、なんという非人道的なことであろうか」と、仲間たちとともに管区長官タスキンのところに抗議に出かけた。結果は物別れに終り、しかもシュテルンベルグは当局ににらまれることになった。アレクサンドロフスクの政治囚を監視していたセンチェンコという役人が管区長タスキンのあてた報告書の中につぎのような文面がみえる (1890年3月8日付)。「……行政的追放人たちの生活を監視した結果、彼らが他の徒刑囚たちと密接な関係を持っていることを知りました。ブラジニコフとシュテルンベルグはブルガレヴィッチ氏をしばしば訪問し、ときにはヴォログディン氏のところにも訪ねています。

行政的追放人が徒刑囚にあたえる有害な影響を考え、貴官の処置にしたがい、中でも気性のはげしいスヴォロフとシュテルンベルグの2名を徒刑囚から隔離するために、

数日中に海岸の一哨所に送ることにいたします。これが最も適当な処置と考えます。実行が終りしだい、ただちに貴官に報告いたします」[СЕНЧЕНКО 1963: 180]。

こうしてシュテルンベルグは北サハリンの西海岸にあるヴィアフトゥ **Виахту** というコルドン(哨所)に送られた。コルドン **Кордон** というのは、刑期満了後住みついた人たちを監視し、逃亡囚人、浮浪者などをつかまえるためにサハリンの各地に設置された哨所であった。ここには監視人と数人の歩哨が住んでいたが、シュテルンベルグは、歩哨たちの部屋と薄い板の壁で仕切られた小部屋で寝起きすることになった。

絶望的なさびしさであった。「夜は白い月が中天にのぼった。にごった虹色の円がそれをとりまき、星をかくした。雪はうす紫色になった。木々は寒さできしんだ。兵隊たちは夕食を終り、昼の疲れで眠りこんだ。小屋の中は羊皮と汗のにおいがたちこめていた」[ГАГЕН-ТОРН 1975: 43]。シュテルンベルグは、石油ランプを引きよせ、静寂と孤独の中で書物を読みふけた。多くの書き抜きをした。

ときには通りがかりのロシア人移住者が訪れた。まれには狩猟の獲物を持ったギリヤクがやってきて、ペーチカの前に腰をかがめて火にあたることもあった。ギリヤクがタバコを吸いはじめると、シュテルンベルグはゆっくりとしたロシア語で語りかけた。

春が近づいた。生きとし生けるものが動きはじめる春は、孤独感がいっそう強まった。空を飛ぶ渡り鳥を見るにつけ、自分の不自由の身をなげいた。1890年春の日記にはつぎのように書かれている。「5月15日。私たちの重苦しい孤独の中で、強さと一片の生きる喜びを天に願わずにはいられない。1日千秋の思いで郵便を待っている……。

いつものように気が滅入っている……。今日はわりあい暖かい。昼前、タイガと海岸を散歩した。雪解け水でなにかも埋まっていた。トドマツとカラマツの幹についた苔は、今変りはじめていた……。しかしなによりも私が好きなものは、やわらかい針葉をつけ、すばらしい香りのする緑色のシベリアマツである。それは丈が低く、何本かまとまって生えているが、そのそばを通ると、胸ほどの高さである。ときにはこの木を抱きしめたくてくる。今日は、なんとまあ、それを手でつかまえて唇に持っていった。新鮮な草が姿を現しはじめた。白い花も見える。昼まで雑誌 *Revue de Deux Mondes* を読んだ。それからツングースと狩猟についておしゃべりをした」[ГАГЕН-ТОРН 1975: 44]。

寂寥と無為は人に自然にたいする愛情を教え、美しいものを見る目を育てる。シュテルンベルグは孤独に負けなかった。彼の心にはしだいに島の原住民にたいする同情

と共感が芽ばえはじめた。彼はギリヤクに強い関心を抱きはじめた。アレクサンドロフスクでは、偶然に、ひとりふたりのギリヤクに出会うだけであったが、ここヴィアフトゥの場合、わずか1.5キロの地点にギリヤクの集落があり、その先にはトナカイを飼うツングースが越冬していた。彼らはよくコルドンを訪ねてきた。シュテルンベルグ自身も、ほとんど毎日のように彼らを訪れた。またヴィアフトゥから10キロほどのところにティコというギリヤクの集落があり、そこのオルクンというギリヤクととりわけ親しくなった。オルクンは狩猟の獲物や魚を持って犬糞でやってくると、シュテルンベルグは代わりにパン、砂糖、タバコをあたえた。彼らはギリヤクの信仰や考え方について話し合い、シュテルンベルグはそれをノートに書きとめた。まもなく彼は、ギリヤクの生活を知るにはその言葉を知る必要のあることをさとった。彼はギリヤクの人たちを先生にして、ギリヤク語の勉強をはじめた。

ヴィアフトゥ哨所の監視人は、シュテルンベルグがギリヤクと接近していることを報告書に書いた。

ピウスツキとの出会い

1890年夏、若きチェホフはサハリン島の徒刑囚と流刑囚の生活を調査する目的でサハリン島を訪れた。彼は長官以下行政当局との衝突を上手に避けただけでなく、ときにはおだてたりして情報を収集し、1893～94年雑誌『ロシアの思想』に名著『サハリン島』を発表した。しかし雑誌に発表される前から、チェホフという新進作家がサハリンを訪れたことは大きなニュースとなり、世間にサハリンという流刑囚の島のあることを知らせ、世論をある程度喚起した。その結果、1891年、サハリン島長官コノヴァッチ將軍は囚人対策をいくらか緩和し、監獄や労働条件について監察を行なった。シュテルンベルグの行動もいくらか自由になった。

1890年12月末、シュテルンベルグは管理当局の許可を得てヴィアフトゥからアレクサンドロフスクまで約100キロを徒歩で歩き、そこで1891年の新年を迎えた。そこから囚人たちのつくった植民の村リュコフスコエ Рыковское を訪れ、10日間滞在して、古くからの友人たちに面会した。

ここでリュコフスコエについて一言のべる必要がある。はじめティミ川の流域の、アレクサンドロフスクから約70キロの地点に徒刑囚が送りこまれ、歩哨と囚人のための宿舎、収容所長の官舎と事務所が丸太で建てられた。やがて刑期満了の囚人たちの住居ができ、1つの農耕集落ができあがった。

1887年、刑事犯の徒刑囚に混じって、アレクサンドル2世暗殺未遂事件の政治犯がこの地に送りこまれた。ブロニスラフ・ピウスツキ、ステパン・ヴォロホフ、ピョー

トル・ゴルクン、カンチェル、イワン・ユワチェフらである。ユワチェフは流刑地で無抵抗主義に転じ、教会コーラスに夢中になった。流刑囚の生き方はさまざまであった。

シュテルンベルグはルィコフスコエではじめてプロニスラフ・ピウスツキに出会った。ガゲンートルンはそのときの状況を、つぎのように描写している。

……背の高い、端正なピウスツキが両手をさしのばしながら近づいた。

—あなたにお会いできてほんとうにうれしいです、レフ・ヤコヴレヴィッチ、いろいろお話をしたいです。

赤味がかったひげが若者の顔を年よりもふけたように見せていたが、しかしその笑顔は少年のように素直で善良であった。

—わたしはあなたの原住民研究の仕事をたいへん興味深く思っています。その仕事は別の世界、つまり囚人以外のサハリンへの出口ですね

—その通りです、なくてはならないはけ口です。原住民の生活の観察は人類発展の理解を助けます。わたしはつぎのことを確信するにいたりました。つまり、なによりもまず、調査しようとする民族の言葉を研究する必要があるということです。ヨーロッパ諸語とは全く構造のちがう彼らの言語体系を身につけてはじめて、自然児とも言うべき彼らの思考と生活を理解することができます。原住民は、動物だけでなく、山の斜面、樹木、大地、海などにも意識があると考えています。それぞれの物象のカテゴリーには主霊があります。私はかなり以前にタイラーの書物入手して読みました。さっきのべたような現象をアニミズムというんですね。私はアメリカで発見されたことを、ここでも見つけたわけです。

私にもそのタイラーを貸して下さいませんか。私は全くの門外漢です。私は大学の1年生のとき逮捕され、あとは独学だけでした。監獄で無為のために手あたりしだいに濫読しました。

私たちはここで民族学を研究することによって重要な仕事をしています、そうでしょう、プロニスラフ……

シュテルンベルグの誠実な目ざしに見つめられて、ピウスツキは生き生きとした [ГАГЕН-ТОРН 1975: 50-51]。

シュテルンベルグはその後、1891年夏にもルィコフスコエに立寄って調査を公式にピウスツキに出会って話をした。このときはもはや、ギリヤクその他原住民の統計的認められての旅行であった。すなわち、サハリン島長官コノヴィッチ將軍は、ヴィアフトゥ哨所監視人の報告によってシュテルンベルグがギリヤクに興味を持っていることを知り、チェホフによって開始されたサハリンの人口調査をつづけようと考えた

のである。チェホフの調査はロシア人が対象であったが、シュテルンベルグの対象はギリヤクその他原住民であった。これは世界的ギリヤク研究者としてのシュテルンベルグの新しい出発であった。実際、人間にとってなにが幸いするかわからないものである。

ギリヤク研究者として認められる

シュテルンベルグは犬橇1台と通訳、生活必需品をあたえられて、1891年2月7日ヴィアフトゥを出発、最北端のマリヤ岬へ向かった。通訳はたいへん利こうなギリヤク、ギベリカであった。彼は日記に書いた。「調査する人々を愛してこそ、人々とその文化を研究することができる」、「人々のために面白い話をたくさんできる人は、そのお返しとして多くのことを知ることができる」[ГАРЕН-ТОРН 1975: 54]。シュテルンベルグはこの調査旅行の中で、ギリヤクの親族呼称に興味深い事実のあることを発見した。子どもたちが数人の女性をウィムク（母）と呼び、何人かの男性を「ウィトク」（父）と呼んでいた。また7歳ほどの男の子が、赤んぼうに乳を含ませていた女性に「アンゲ」（妻）と呼びかけると、その女性が男の子に「プー」（夫）という呼称で応えた。通訳のギベリカは言った。

一女性は自分の夫の弟をみな「夫」と呼んでいます。

この事実は一体どのように理解されるべきであろうか。彼はギリヤクの中でグループ婚の名残りのあることに注目し、多くの事例を集めて論文にまとめ、モスクワの自然学・人類学・民族学愛好者協会に送った。1892年10月10日、その協会の席上で論文が審査され、10月14日発行の雑誌『ルスキエ・ウェドモスチ』に要旨が掲載された。フリードリヒ・エンゲルスはこれを読んでドイツ語に翻訳紹介した。1893年初頭、シュテルンベルグの全文が雑誌『民族学評論』（2-3号）に掲載された。シュテルンベルグはこれによって世界に認められ、ついにサハリン島からの出口を自ら切り開いたのである。この論文の抜粋はリュコフスコエにいるピウスツキにも送られた。ピウスツキはこれによって大いにはげまされたにちがいない。

シュテルンベルグは1891～92年の冬をアレクサンドロフスクで過ごし、92年2月には近くでギリヤクの熊祭りを見た。92年夏は南サハリンを調査、はじめてアイヌに出会った。

1895年2月「アムール新聞」の編集長A・コルドフスキーからシュテルンベルグは新聞の寄稿者のポストを提供され、一方アムール地方研究協会および地理学協会ハバロフスク支部はシュテルンベルグがアムール地方のギリヤクその他の原住民研究のためサハリンをはなれられるよう、サハリン島の行政当局に願い出た。サハリン島の行

政当局はこれを認め、彼はウラジボストクとブラゴベシチェンスクに入ることを許された。1895～96年にかけて、彼はアムール川、ウスリー川流域、ウダ川、インペラトリスカヤ・ガワニのギリヤクやオロチを3度訪れた。また、1896年の前半だけで、新聞「ウラジボストク」に52点の文章を書いた。彼がいかに精力的に活動したかがわかる。

その年の秋、シュテルンベルグはサハリン島に帰るべきだとの命令をうけ、いったん帰島したが、97年5月、特赦によって故郷に帰ることを許され、ウクライナのジトミルへ向かった。実に11年ぶりであった。幼少の思い出につながる生家は売りはられ、両親の住所は変っていた。姉妹は嫁ぎ、兄弟たちは学業を終えて遠い別の町でくらししていた。シュテルンベルグは、すっかり老けてしまった両親との再会を喜び合った。やはり、生きていくことはよいことだ、と彼は思った。

ここで彼は、ペテルブルグのベストゥージェフスキー・クルス（学校）を卒業して、教師としてジトミルに赴任したサッラ・ラトネルという若い女性と知り合った。ふたりの間には愛情が育っていった。

サハリン時代の友人たちからの手紙が届いた。1898年春にはプロニスラフ・ピウスツキからの手紙が届いた。それによると、1898年から彼はサハリンのリュコフスコエの測候所勤務から大陸へ移ることを許され、今は農民の身分でウラジボストクに住み、アムール地方研究協会（博物館）で働き、新聞「ウラジボストク」の編集にも加わっているとのことであった。かつてシュテルンベルグもこの新聞に記事を書いたことがあった。ピウスツキがウラジボストクへ去るときにはサハリンのギリヤクやアイヌが泣いて別れを惜しんだという [Сенченко 1963: 130]。

ピウスツキはこのとき、エンディン Эндын という17歳の若者をウラジボストクにとめない、教師として彼を養成しようとした。エンディンはピウスツキの有力なインフォーマントであったチュルキの弟であった。ふたりはウラジボストクで著名な文化的活動家マトヴェエフ・アムールスキー Н. П. Матвеев-Амурский の家に寄寓した。しかしエンディンは残念ながら結核にかかり、まもなく死亡した。

一方、シュテルンベルグは、故郷ジトミルではほとんど研究ができないことをさとした。インフォーマントも書物もなく、同好の仲間もいなかった。彼は首都ペテルブルグへ出たいと思った。ギリヤクの言語資料に関する彼の著作を出版できるのはロシア科学アカデミーだけであった。しかも、クロリヤボゴラズは逮捕直前に大学を卒業していたが、シュテルンベルグは卒業直前に逮捕され、結局中退の形になっていた。彼はペテルブルグ大学当局に、もう1度卒業試験を受けさせてほしいと頼んだが、ことわられてしまった。シュテルンベルグは落胆し、焦燥の日々をくらし続けた。

1899年2月、ペテルブルグにいるボゴラズからの手紙が届いた。

「今日は、レフ！ まず用件からはじめます。私はあなたのテキストについてアカデミクのザレマンと話をしました。彼が言うには、まずテキストそのものを見る必要があります；判断はそれからの話だとのことでした。国際的なギリヤク語のアルファベットはありません。1892年グルーベの労作が刊行されており、別便でお送りします。それからヨヘルソンの研究と私の研究の校正刷を見本として送ります。

比較言語学の教科書については、ザレマンは私に1冊も推薦してくれませんでした。それに、そんなものはあなたにとって必要ないと思います。むしろつぎのことをお願いします。数編のギリヤク語テキストを書き移し、それを文法的にくわしく分析して下さい。音韻、文法、シンタクシスの分析がくわしければ、くわしいほどよいと思います……。

ご承知のように、いく分かの厚顔無恥によって私はペテルブルグにたどりつきました。「突撃」の形でやってきて、交渉の結果一時的に滞在を許されました……。ロシアで臨時的な扱いは広く根を下しているのです、私は今後のことをあまり心配しておりません……。私のこめかみは白くなり、額の皮はそこなわれました。しかし全体としては、私はまだそれほど老けておりません。ご存じのように、私はヨヘルソンら仲間とともに学者・研究者の道を歩むことになりました。しかし古い酵母が発酵し、私を作家の道に追いたてます。この2台のモーターの力が衝突して、どんなことになるかはわかりません。

クロリも似たようなものですが、彼の場合にはさらに弁護士という仕事に加わっています。ヨヘルソンは自分の立場を確立し、悪魔と言えども彼を動かすことはできないでしょう……。ごめんなさい、もう書く時間がなくなりました。私は博物館に出かけねばなりません。この手紙が届いたら、またお便りを下さい。宛名はつぎの通りです。

科学アカデミー、民族学博物館、ウラジミル・ボゴラズ」

[ГАГЕН-ТОРН 1975: 115-116]

シュテルンベルグはボゴラズのこの手紙にはげまされて原稿を仕上げペテルブルグに送った。1899年8月19日付で、ボゴラズから返事がきた。「あなたの労作を受け取り、今読んでいます。ザレマンはあなたの論文をベルリンのグルーベに送って評価してもらおうと言いましたが、私はあまり賛成せず、自分で読んでほしいと頼みました。彼はすでにあなたの論文を科学アカデミーの報告として印刷するよう提案しました……。ヨヘルソンは3日にペテルブルグに着きました。私たちはアメリカに

出かける準備をしています」[ГАГЕН-ТОРН 1975: 116]。

ボゴラズとヨヘルソンは、アカデミー会員ラドロフの推ぱんによって、ジェサブ調査団の1員として出かけることになったのである。

シュテルンベルグは1899年ペテルブルグに移り、人類学・民族学博物館の研究員の職を得、ザレマンの積極的な助力によって『ギリヤクの言語とフォークロア研究のための資料』*Материалы по изучению гильяцкого языка и Фольклора. Тексты с переводами и примечаниями*, т. I, ч. I, СПб., 1908. を発表し、研究者としての地歩を確立した。一方、1904～14年間、博物館で不定期に民族学に関する講義を行ない、収集と展示の計画に加わった。1900年以後、ブロックハウスとエフロンの大百科事典の民族学関係の項目を監修した。

シュテルンベルグが籍をおいた科学アカデミー付属人類学・民族学博物館は、ピョートル1世の創立になるクストカメラに起源し、1879～94年間の館長は著名なギリヤク研究家、アカデミー会員シュレンク Л. Шренк であった。彼は自らはすぐれた研究を行ない、不朽の大著を発表したが、博物館長としては、ほとんどなにもしなかった。1894年から10年間、著名なチュルク学者ラドロフ В. В. Радлов が館長となり、博物館の収集、展示、研究に大いに貢献した。シュテルンベルグの勤務がこのラドロフ館長の時期にあっていたことは幸いであった。ラドロフは館員の才能を十分に引き出し、またのびしたのである。

1902年、シュテルンベルグはついにペテルブルグ大学の卒業証書をもらうことができ、博物館の上級研究員となった。アカデミー会員オルデンプルグ С. Ольденбург とラドロフがアジア研究国際委員会を設立したのにもない、シュテルンベルグがこれのロシア支部の書記となった。委員会からアジアの各地へ調査団が送られ、そのコレクションの1部は人類学・民族学博物館に入った。シュテルンベルグは国際学会にロシアの代表として出席し、ベルリン、ライプツィヒ、ストックホルムなどへも業務出張した。

1903年には、博物館は標本収集のためにブロニスラフ・ピウスツキをサハリンと北海道に派遣した。ピウスツキは同じくポーランド出身の政治犯「上がり」のヤクート民族学者セロシェフスキー В. Л. Серошевский と行動をとにしたが、ピウスツキは期待にこたえて、主としてアイヌ資料を大量に集めた。シュテルンベルグはアイヌ文化を熱心に研究し、1905年、ペテルブルグ大学付属人類学協会で「アイヌ族におけるイナウの信仰」と題して講演した。また1926年、東京で開かれた第3回国際太平洋

会議での報告もアイヌ問題であった。今日なお、アイヌ南方起源論の代表的論文とされる「アイヌ問題」は彼の死後の1929年に発表された。

1910年5月15日、シュテルンベルグは学生・ザルービン И. И. Зарубин とアンシエリス И. Н. Аншельс をともなって、主としてゴールド（ナナイ）の調査のためにアムール地方とサハリンに出張した。5月31日ウラジボストクに着き、（当時16日かかった）、昔の友人たちと再会、6月3日ハバロフスクへ向って出発した。このとき彼はピウスツキがシュテルンベルグに送った2通の手紙を持参し、古い友人たちに見せた。この手紙の文面は、読む人の涙をさそわずにはいないものであった。この手紙にはすでに、1914年絶望の果てにパリのセーヌ川に投身自殺する彼の運命が予感されると言っても過言ではない。

第1の手紙はつぎの通り。

1909年1月1日、リヴォフにて。

親愛なるレフ・ヤコヴレヴィッチ！。

今日はあなた方の新年、心よりお喜び申し上げます。サハリンのきびしい冬と、いっそう粗末な状況が思い出されます。

限りないかなしみ、未来のよりよいもの、ちがったものへの不信。しめつけるような悲しみ、孤独感、隔絶され、忘れ去られた気持。このような暗いものを背景にして、たのしい日々、すばらしい友人たちといういくつかの明るい点々が散らばっています。今、私はこのわずかな明るくて喜ばしい事がらを数えあげてみます。あなたのことを私はしばしば思い出します。最良の思い出はあなたと結びついており、お会いしたときからつらい別れのときまで、1つとしていやな思い出はありません。

過去はぬぐい去られます。それについて考える余裕はありません。過去の中につきこまれた情熱が惜しくなります。今ではもう、あんなことはできないだろうと思います。友人、共同の苦勞、ギリヤク、流刑囚の子どもたち、不幸な徒刑囚、そして少数の捨てられたインテリたち……。

しかしすべては若さによって色どられている。流刑の島の足枷の下から、ひたすらに太陽と人生と行動へほとばしった心。あの頃苦しみながら私たちが愛しあった人々を、今ここでみんな集めてみたいと思います。いつの日か、集まってあの苦しかった、しかし心のこもった過去について語り合うことはできないものでしょうか。

あなたを抱擁します。そして、あなたが文通したり、会ったりする他の人々にも心からの挨拶をつたえて下さい。

あなたのプロニスラフ

ピウスツキは必死になって、研究のつづけられる定職をさがしていた。アメリカの民族学者フランツ・ボアズ F. Boas にも手紙を書いたが、うまくいかなかった。今、彼はパリへ行って、自分の著書出版の可能性をさがそうとしていた。第2の手紙は1909年10月19日付のものであった。発信地は、ガゲントルンには書かれていない。

地理学協会の（ロシアの——加藤）の民族学支部と P・セシヨノフにあてて、今年なにかの助力がほしいと頼みました。なんとかなりますかしら。こうすることは恥ずかしくもあるが、しかしどうしたらよいか、全くわかりません。なにか確実なものにとりつくことがどうしてもできません。この捨てられた気持、この確信のなさ、期待、幻滅が私を苦しめます。こうしたことは、当然のことながら、仕事の生産性をひどく減少させます……。

あなたを心から抱擁し、助言、そしてもしできるなら協力を待っています。

あなたのプロニスラフ

[ГАГЕН-ТОРН 1975: 141-142]

ピウスツキの状況はシュテルンベルグよりもずっとみじめであった。ポーランドは当時3つの大国に分割統治されており、帝政ロシア国内で研究者などの地位を得ることはたいへん困難であったようである。ガゲントルンは、「自由な身での学問の道は、流刑の身の場合よりも難しかった」と書いている [ГАГЕН-ТОРН 1975: 143]。

シュテルンベルグはハバロフスクでアルセニエフ В. К. Арсеньев に会って話をした。第1次大戦では、シュテルンベルグは都市連合から前線に取材に出かけたりしたが、暗い時期であった。

戦争と革命を経て1918年、シュテルンベルグは地理学研究所民族学部の部長となり、若い研究者の養成にとりかかった。ボゴラズもこれに加わった。彼の好きな言葉は「民族学は旅行家の学問である」というものであった。シュテルンベルグはレニングラード大学でも教授として講義した。多くのすぐれた研究者が育っていった。シュテルンベルグは、多くの人々に愛惜されながら、1927年8月14日レニングラードからあまり遠くないドゥデルゴフ村で永眠した。シュテルンベルグの見事な伝記を書いたガゲントルンは1922年にはじめてシュテルンベルグの講義を聞いた女性であるが、恩師の葬式の列に加わって感じたことをもって、その著書をしめくくっている。

「私はシュテルンベルグの目をまっすぐ見つめるようにして言う。『レフ・ヤコヴレヴィッチ！ 私の願いは1つだけです。どうか私の生涯がまっすぐでありますように。いつも横道にそれずにまっすぐでありたい。どんな妥協もなしに……、あなたと同じ

ように……。』レフ・ヤコヴレヴィッチは私の言うことを聞き、そうなることを信じているように見えた」[ГАГЕН-ТОРН 1975: 229]。

文 献

- Альков, Я. П.
1935 В. Г. Богораз-Тан, Советская этнография, No.4-5, М. pp. 5-31.
- ГАГЕН-ТОРН, Н. И.
1975 Лев Яколевич Штернберг, М. p. 236.
- ЗЕЛЕНИН, Д. К.
1937 В. Г. Богораз—Этнограф и фольклорист, в кн. Памяти В. Г. Богораза, М.-Л. pp. V-XVIII.
- КУЛЕШОВА, Н. Ф.
1975 В. Г. Тан-Богораз, Минск. p. 112.
- МОГИЛЯНСКИЙ, Н.
1914 Памяти Д. Л. Клеменца. в кн. Материалы по этнографии России, СПб. pp. I-VII.
- СЕНЧЕНКО, И. А.
1963 Революционеры России на Сахалинской каторге, Южно-Сахалинск. p. 192.
- ТОКАРЕВ, С. А.
1966 История Русской этнографии, М. p. 454.
- ШАВРОВ, К. Б.
1935 В. И. Иохельсон, Советская этнография. No. 2. М. -Л. pp. 1-15.
- ИОХЕЛЬСОН, В. И.
1918 Далекое прошлое, “Былое”, No. 13.